
我楽多町の海辺で

石井ジュニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我楽多町の海辺で

【Nコード】

N2571Q

【作者名】

石井ジュニア

【あらすじ】

「自分は周りとは違う、特別な人間なんだ」と信じている西田聡は14歳。

彼はある日、親友の圭介と共に昼間の公園で一人のサラリーマンに遭遇する。

「初めに」

俺は圧倒的に正しい。

そう思うのって間違いか？俺の考えてる事が正しけりゃ正しいか？物事によるよな。

とにかく、もうあんまり口開きたくないよ。耳も閉じられるなら閉じてえな。世の中、つまらない奴が多すぎて。

つまらないってのはお笑いとかの面白い、面白くないじゃないんだ。何てゆうか…、例えば昼休みの教室で…、「リンゴまるかじりが俺の昼食」ってオシヤレだよな。

あ、それを口に出しちゃいけないよ。今のセリフを。それは違うね。俺さ、ケンカとかそーゆーのは弱いけど…、した事ないから分らないけどさ、でもこの前の体育のスポーツテスト、D評価だったから多分弱いよ。

でも世の中の本質を見抜く力とか、美学センスに長けてる気がするんだよな。

リンゴまるかじりってオシヤレだろ？

俺の年齢…、あーあと名前言わなきゃな。14歳、西田聡。にしださとるね。

本当は聡で「さとし」だったらいいんだけど何の手違いか、出生届け出した時に「さとる」で登録されちゃったらしくて、俺が二歳の時にマンションに暮らしてた俺の両親が親父の方のじーちゃん、ばーちゃんと暮らすために建てた二世帯住宅に引っ越して、その住民票やらの手続きの際に「さとし」が「さとる」になってた事に気付いたらしいんだよね。そこでたまげるのが二年間以上呼び、呼ばれ慣れ親しんだはずの「さとし」を、修正の手続きが面倒臭かったとの理由で「さとる」と次の日から呼び出したウチの家族だよ。ノン

キなんだ。それに尽きるよな。俺の家族に限らず俺の住むド田舎、
我楽多町がらくたはそんな人間ばつかさ。
そんな中に生まれちゃった孤高の天才、西田聡（「さとる」だよ。
もうそれで俺もいいよ）は物心ついた頃から自分と周囲との精神レ
ベルの差にガツクリしっぱなしなんだ。うん、そうなんだよな。

くすくす

「おー！ジーザス！」

聡は大袈裟に口を歪めた。揺れる小銭は総額236円。聡の全財
産だ。

愛読雑誌、月刊Mr. Elephantミスター・エレファント9月号の値段は税込み62
0円、つまり全然足りない。

創業して22年の金沢堂：この本屋のカウンターの奥に座る分厚い
眼鏡を引つ掛けた白髪の男、いかにもボロボロの本屋の店主らしき店主は、
芝居がかった悲鳴を上げた聡に一瞥をくれたものの、それ以上の興
味は示さなかった。

聡は店主の反応に口先を尖らせつつ、自転車にまたがった。

「ああ、下らねえ」

聡はつぶやく。実は何が下らないでもない、これは口癖だ。面白
くない時にはつい出てしまう。

ここまで金が無かったとは。本屋に来てから気づくなよ。

聡は闇雲に反省した。今月は3000円の給料（小遣い）を何に使
ったつけ。まだ9月に入ったばかりだというのに。

「でも暑さは8月だよな」

身体のあるゆるパーツから煙が出る気がした。撰氏…？気温…？
俺は理系脳じゃないから分からないけど、ここはもはや日本じゃね
え…。

こんなに暑いんだから8月の31日に戻って、次の日もう一回9月
分の給料を貰う権利があるんじゃないか。だって暑さは8月なんだ

から。それが正當なんじゃないか。

かーちゃんはこのナイスアイデアに理解を示すだろうか…。我ながら勝算の低さに体が重くなった。無茶な夢見てたって、しゃーねえ。二回くれるか、バカ。

腹に溜め込んだ空気を一気に吐き出した。つたく…、Mr・Elephantを買わずして何を買ったんだ。人を糖尿病にしてくれるお菓子だの、もう棚に入りきらない漫画の単行本…。馬鹿だな。

Mr・Elephantはファッション雑誌だ。

主にストリート系ブランドを扱っていて、当たり前ではない、プラスの利いたコーディネートと編集部の独特の斜めからの視点によるアイテム紹介は業界でも随一（聡評価）で、毎月固定の楽しみとして聡の生きる糧だった。

あの文体は「俺のセンスはてめえらじゃ理解できねえだろ？でも、仕事だから仕方なくちよつとレベル落としてるんだ」って考えてる奴の文だ。俺の見立てに間違いはねえ。聡は肩を上下した。

聡は、Mr・Elephantを尊敬している。他の雑誌は次々とファッション雑誌に音楽情報、車情報、お笑い…、節操もなく次々に詰め込むのをMr・Elephantは未だに純粹、ファッションのみだ。もちろん多少の広告の類はあるのだけれど。

でも、こんな雑誌を聡は他に知らない。安売りをしない態度が好きだ。節操をなくしたら、心が締まらない。

聡はペダルを深く踏み込んだ。どうしようもなく暑い学校帰りの午後だった。

「うお、聡」

突然、名前を呼ばれてびっくりとした。背後からだ。いかん、女子だったらどうしよう。そんな簡単に都合よくはいかないけど…。もしも、もしもですよ…、この後デートになったら、俺236円しか持ってない。

もちろん杞憂だった。聡の耳と脳は朦朧とする意識に甘えて声の主

の性別の特定さえも怠けていた。

「なんだ、圭介か」

薬局から出てきた所で、自転車の鍵を探しているのだろう、ポケットをまさぐりながら聡に顔を向ける。薬局に入るぐらいで鍵をしなくてもいいだろう、結果いつまでも見つからなくってお前は総合的に損をしている。聡は勝手なことを思った。

「お前、クスリやってたのか。道理でロレツ回ってなーと思っただぜ」

「何でだよ。薬局から出てきたから？薬局の方が、コンビニよりお菓子安いんだ。それより聡、どこ行くの？」

「帰るんだよ。帰るの。だってあちーだろ。」

豊島圭介は聡とは同級生で、幼稚園から中学までの付き合いで、同じクラスには7回ほどなっている。

幼稚園で1回、小学校で4回、中学で2回、…とまあ、相当のヒット率だ。聡としては個人的に非常に好まない平易な言葉ではあるが、あまりに分かりやすく言うと、腐れ縁で親友というやつだった。

聡は精神レベルの低い（もちろん、これも聡の独断と偏見による基準によるものである）人間をほぼ例外なく軽蔑しているが…、圭介はその例外だった。

つまり、それは裏返せば聡が圭介の精神性を相当に軽んじているということでもあるのだが、圭介が、そのどちらでも聡は圭介が好きだったろう。

一緒にいたからだけじゃない、圭介はドンくさい男だ、しかし天然の優しさがある。

これはひねくれ者の聡なので、口に出すことはおろか脳内ですら決して言語化はしないが、本当は尊敬していたものだった。

常に漠然とした自信を抱えた聡だが、圭介を前にすると自分の冷笑的な部分を後ろめたく感じてしまうことが今まで何度もあった。

難しい話は抜きにしても、聡にはせっかちなところがあるし圭介はとろくさいし、絶妙にウマが合う、だから親友だった。

それにこれは本人達は全く自覚していないが…、二人とも友人が少なかったので、必然的な遊び相手とも言えた。

「聡さあ、今から駅前行くよ」

聡は呆れた。

「嫌だ」

自転車にまたがった圭介の片眉が上がった。

「え…？何で？まだ何かがあるかも話してないじゃん…」

「言ったら、俺は帰るんだ。この暑さ、尋常じゃない。」

「でもさあ」

「うるさい、俺の肉体は既に…」

聡が振り返った時、圭介は別の方向を見ていた。

「おい、人の話を…」

圭介は人差し指を口にあてた。このポーズの意味を日本に住む者なら誰でも知っている。聡は声を潜めた。

「…何…？どうした…？」

圭介は目配せをして、聡の視界を自分の視界と重なる位置に導いた。そこは公園の中だった。今はまだ5時半なのにブランコにスーツを着た50代くらいの男がうつむき、座っていた。

はげてはいなく、まだフサフサとしている黒髪を確認して聡は何故かガツカリした。

「アレかな？」

圭介が言った。

「アレだな。」

聡が同調した。圭介は目を細めて虚空を見つめた。

「うちの父さんも危ないって言ってたからね…、あの人、リストラかな？倒産かな？あれ、深刻なのってどっちだっけ？」

「どっちも深刻に決まってるだろ。でも、今の俺様は同情している気分じゃないぜ」

聡は実際…、相当イラついていた。暑さのみならず、原因の分からないさらなるストレス（聡は既に忘れてしまっているが、これは

先程圭介に話を途中で遮られたストレスであつた)が聡の精神をガングン凶暴な方向へ導いていた。含み笑いを携えて、聡は公園に侵入して行つた…。

「え？嘘でしょ？やめなよ、聡！」

蚊が止まりそうな圭介の鈍い声は聡を諷めるだけの力を持っていなかった。

「やあ、おじさん。リストラ？それとも倒産？」

自転車から飛び降りると同時に、聡は言つた。言つてしまった。

圭介は体中を震わせ、手で顔を覆いつつも、その隙間からこの次第を窺つた。

しかし、スーツのおじさんは笑つた。もちろん、豪快に、などの類のものではなく、力なく…、あるいは自嘲的と言える笑いだつたが。圭介はまだホツとした。

聡は少々、不満そうだったが、遠のいていた危機管理の意識がにわかに目を覚まし、安堵した。

あつぶね。オッサン結構、ガタイいいじゃん。飛び掛かつて来てたら、俺じゃまず勝てなかつたな…。それにこの土みたいな顔色、首吊り用のロープ渡したら今すぐ逝けそうだ。

いやはや、このシニカルな俺にも良心つてやつはあつてね…。

おじさんは返事をした。

「リストラも倒産もしてやいないよ」

おじさんは一呼吸、置いた。

「ただ今日、会社をサボつてね」

聡は、後悔して損をした…と思つた。何だ、このオッサンは。そう言えば、なんかこの公園臭い気がする。このオッサンだな。

「それっていいの？」

聡は聞いた。おじさんは再び顔をうつむけ、答えた。

「いいわけはないよ。ただ…、辛くてね。いや、辛いと言うより疲れたんだな」

圭介がいつの間にか聡の隣にいて、お前に何が分かるのか悲しい

顔を作って雰囲気溶け込んでいた。聡は続ける。

「何が疲れたの？」

おじさんは顔をしかめた。眉間に旗を立てたかのようにしわが一斉集合し、今までよりずっと老けて見えて60歳を越えたようだった。もつとも、正確な年齢だって聡は知らないが。

「大人の社会かなあ。若い頃から一つの会社で汗水垂らし…、結構前になるけど家を建てて…、それからちよつとして娘が嫁に行つて…。念願のマイホームも…、娘の幸せそうな顔も…。上司にみんなの前で大声で怒鳴られたけど我慢して良かった。取引先に裸踊りさせられたことあつたけどヘラヘラして良かった…、自分にそうやって言い聞かせて…。何度もあつたのに…本当は苦しくて、全て投げ出して楽になりたかつた時…。でも頑張つて…」

おじさんは息継ぎごとに更に老け込む。

「でも…、昨日寝ようとして布団に入った時ふつと…、結局それってなんなんだろう…、これが俺の欲しかった人生なのかな…って」

おじさんは少し笑つた。

「まあ、誰でもあるよな。こんなふうと思うのは。もちろん、人生が虚しいだの思つたのは今日が初めてじゃないし。でも…」

「今回の虚しさが、私には無視できなかったんだ…。」

聡はおじさんの目を見て聡の祖父の壊れた原付から漏れてるガソリンを思い出した。たつぷりドロリと濁つてる。今にも隣の色に迷惑をかけそうな。

「それでね…、会社を辞めてやろうと思つて…」

聡と圭介は息を飲み込んだ。いかん…、リストラではなく自主退職だったのか…？

ゴメン、でもオッサン、今更八つ当たりはナシだぜ。これだけ聞いてやったじゃんかよ…。そうではなかった。

「最初ね、辞表書こうと思つて、上等な用紙を家で探したんだけど…、見つからなくて。でも、買いに行こうと思つたらやっぱりそんな度胸は無いことに気づいて。それで、少なくとも今日は無断欠勤

してやるうと思っただけ……」

「結局、『風邪をひいたので休ませてください』って会社に電話してたんだ……。サボったなんて言ってもこの様……。挙句にかみさんがいるからウチにはいれず、スーツで出勤したフリを……。その時、思っただよ……。俺に瞬発的な度胸が無いのはもちろん、もう俺はこの俺の人生から逃げられないんだって……」

圭介が震えているのが聡の横目に見えた。もしかして泣くんじやないだろうか？おじさんは続けた。

「そう思ったら……。公園に来ていたんだ。子供の頃に戻りたいなって思っ……本当に自由で日が暮れるまで遊び回った……うん、ちょうどあの子達のように……」

おじさんの視線の先には幼稚園児ぐらいであろうか、数人の子供が輪を作るような形で砂場で遊んでいる。そこで、ふと我に返ったようにおじさんは聡と圭介の顔を見比べるように凝視した。

「あ、あ、すまん。ごめんな」

「こんな中年のつまらない話、聞きたくなかったよな。ごめんな。」
急に立ち上がり伸びをした。

「本当にごめんな……。おじさん、誰かに話を聞いてもらいたくてこんなブランコで揺られてたりしてたのかもな。君が最初、言ったようにリストラされたサラリーマンでも模倣して雰囲気酔っててもいたのかもしれない。恥ずかしい」

本人の言うように照れくさいのか、息もつかずに喋り続ける。

「君達、制服から見るに中学生だろ？まだまだ自分の自由な夢を追える絶好調な時期だからな！大事にな」

おじさんは二人の肩を掴み、反転させ、背中をポンと叩いて前に押し出した。

〜中〜

聡も圭介も流されて、そのまま公園から出てきた。圭介がつぶや

いた。

「かわいそうな…おじさんだったね」

しかし聡は言った。

「あんなん負け犬だぜ」

圭介はギョツとした目を聡に向けた。

「えー！？いくらなんでも、それはきついんじゃないの…？かわいそうな人だったよ」

聡は譲らない。

「オッサン本人言つてたけどあんな程度の悩み誰だつて抱えてるぜ。だつせー奴だよ。あんな大人にはならねーぜ」

圭介は半ば呆れるような、半ば感心するような音を出した。

「ふーん。聡は本当にシビアな考え方をするね。俺には出来ないよ」
聡は腕を振り上げた。

「ばっか、お前、当たり前だつっーの。それより俺、オッサンが話の大事なトコで『布団ふとんに入った時ふつと』って挟んだのが気になつてよお。吹き出しちやいそうだったよ。あれ、あのクソ重い空気演出しといてワザとやってんならオッサンなかなかの芸人魂…」

「聡ってホントそんなことばっか言ってるよね…。なわけないじゃん」

「いやいや、分かってるけどさ…。そう考えでもしなきゃ聞くに堪えない…あれ？」

何となく圭介が主導するように走るので、そのままついてきたが気づけば駅前に来ていた。

我楽多駅の歪みっぱなしの看板が目に入った。思わず聡は声を上げる。

「あ…、お前」

圭介が得意そうに笑った。

「もう、いいじゃん。いつの間にかそんなに暑くないだろ？ちよつと遊んで行こうよ」

聡は、何だか一杯食わされたというのが妥当なこの状況に、不服

ながらももある種の爽快感を感じて圭介の真似をして笑った。

「ホントだな、いつの間にか。お寒い話を聞かされたせいか」

自分のギャグというよりはユーモアなセリフにも満足できた。続けて、聡は尋ねる。

「で、何があつたんだっけ？何か『からフェス』があるんだろ。今日は9月5日だもんな」

我楽多町は、人口の少ない田舎町だ。

数十年前の町興しから始まった我楽多町は、その時の企画の一つとして、正式名、我楽多町わっしょいフェスティバル、略名からフェス。奇数月の5日に何らかの大会をするというものであり、その伝統は未だに続いているのだ。

先月のからフェスはダーツ大会、先々月は落語大会だった。何でもやる、ためネタは尽きることを知らない。

大会は原則として、男女、年齢、町民であること以外全てを問わず、本人の意思さえあれば誰もが参加可能であり、賞品は一等から五等まであり、毎回それなりのものが取り揃えられている。

からフェスが行われるのは、いわゆるお祭りなので、からフェス自体の参加料は無料であり、町内会の会費、出店の出店料、その他もろもろで収益でからフェスは運営される。

聡はもう長いこと、このからフェスに参加していなかった。

聡は何が嫌いかって、みんなが同時に提供される悦びに仲良しこよしに、「楽しいねえ、この上ありません」って同じ顔して乗っかることだ。

嫌だ嫌だ。小学生の低学年ぐらいまではノンキな家族に連れられて参加したこともあつたけれども、小学校3年生になった時の4月5日のからフェスで無理やり連れて来た父親のその手に噛み付いて逃亡して以来、ご無沙汰をしている。

しかし、まあ、今日は特別。騙されたんだ、圭介に。

騙された奴は騙した奴の思惑に操られる必要がある。それは、ある意味での聡のルールだった。だから、今日は特別。

聡は訊いた。

「んで、今回の競技は何？」

圭介は答えた。

「早食い大会だつてさ。」

聡は一気に興ざめした。

「ああー、帰って寝よう」

圭介は歩みをを翻した聡の前に横に体を入れて立ちはだかった。

「ちょ…、ちょっと待ってよ」

「何だ、お前、俺に断りもなく通信空手でも始めたのか。今のプロっぽかったぞ」

「何の話さ」

聡は圭介を叱り飛ばす。

「うっせー。うっせー。俺は早食いとか大食いなんてのは大嫌いなんだ。アフリカでは貧しい子供達が腹ペコで泥水すすってんに、遊びのためにパンパンの腹に更に更にと食料ブツこんで恥ずかしくないのか、お前は。ばかやろー」

聡は圭介の反論を一切許さないための、思ってもない建前を突きつけた。早食い？冗談じゃない。人前であんなみつともなく口も腹も膨らませられるか。それでも圭介は全身を使った大量のゼスチャーで誠意を伝えようと試みる。

「そりゃ、そうだよ。聡の意見は確かに正しいよ、でも、そういう話じゃないんだつて。俺、欲しい賞品があるんだよ！」

聡は更に切り返した。

「それがどーした。やりたきや勝手にやれや。夢は一人で掴め、さっきのオツサンも言つてたろーが」

圭介は引かない、慌てて聡のカッターシャツの裾を掴む。

「そんなこと言つてないよ！お願い！」

聡はあんまり圭介がシャツを強く引っ張るので、丁寧に圭介の手をシャツからはがしつつ、訊いた。

「言ってみる、何が欲しいんだ」

圭介は慎重に答えた。

「3Dテレビ」

聡は硬直した、それでも一秒後には慌てて口を開く。

「嘘だろ？ちよつと前、親父がからフェスで二位取ったけど、その時親父が持つて帰ってきたのはゴミみてーな目覚まし時計だったぞ。」

圭介は我が意を得たとばかりに身を乗り出す。

「ホントホント、もちろんー等だけだね。最近、からフェスが参加者少なくなってきたからつて、今回は凄いんだつて！それに、最近聡の部屋のビデオ調子が悪いつて言つてたじゃん」

聡は急に顔が赤くなった。

「俺が未だにビデオ使つてんのに文句でもあんのか！」

圭介も言つた後でうかつだったと反省した。前に圭介の部屋のDVDプレイヤーで再生される画像を見て「全然きれいだと思わな」とか「いらぬ機能が多過ぎて使いづらい」だの露骨にすねていたことを思い出した。

「俺あ通だから、今時の浮わついたバラエティじゃなくて昔録画したバラエティが見てーからビデオ使つてんだ！」

「違つよ。そんなつもりで言つたんじゃないよ！」

「たけしのホツカホツカタイムがDVD化してんのか！？ああ！？」
聡の鼻息をモロに目に受けて涙が出そうな圭介は懇願するように言つた。

「最後まで聞いてよ！今回、三位でビデオ内臓のDVDプレイヤー出るらしいよ！」

目を抑えながら圭介は返す言葉を失つた聡を励ますように最後に付け足した。

「それならDVD化してる北野ファンクラブも見れるよ…」

からフェスは、6時から始まる、選手登録はギリギリの5時50分までやっているの聡も圭介も無事、登録を済ませ、競技開始を

待った。

唯一の参加資格の町民であるか否かだが、実は住民票などの手続きはなく開催当時からずっと係員をやっているおばちゃんは普段町役場で働いており町民全員の顔を知っていると豪語し、聡も顔パスだった。その時、おばちゃんに「大きくなつたねー」と頭を撫でられた聡が瞬間、鬼のような目つきをなつたのを圭介は見逃さなかつたが。

今回の参加者は100余人と言つたところだろうか。大人も子供もいるが、同世代はほとんどいない。

聡は舌打ちした。つたくよ、中学生ぐらいになるとみんな意識しだすもんだ。

恥ずかちー恥ずかちーってよー。遅い、遅い。俺は同級生の羞恥に対する目覚めの遅さにいつも辟易してたんだ。

しかし奴らがいらないならこつちも好都合だ。とは言え、ちつぽけな町だし参加者には知ってる顔も少なくない。

爪先立ちで賞品の方を伺っていた圭介とは対照的に聡は声をかけられるのが嫌ですつと前方のおばちゃんの靴のかかとを見ていた。

やたら、時計の針が進むのを遅く感じたが、それでも6時になった。「みなさーん、今日は待ちに待つた9月5日ですよー」

我楽多小学校から借りてきたのだろっ、ひな壇で作られた簡素なステージの上に身長170?くらいの気の抜けた司会者が出て来た。

「あれ？山路くんじゃん」

圭介がつぶやいた。聡は目を凝らした。本当だ、司会者は同級生の山路くん。山路くん、中2にしては背が高いからな。聡は尋ねる。

「何で司会者が山路くんなんだ？」

「さあ」

しかし聡は気づいた。

そう言えば山路くんとこの家のじいちゃんが副町長で、このイベントを仕切ってるのは山路くん一家だってどこかで聞いたっけ。

しかし、まがりなりにも一応町の一大イベントの司会が中学生というのはどうだろう。毎回、どっかの売れない芸人みたいなのがやってるのに……。どうやら今回は3Dテレビで予算を使い過ぎたようだな……。

山路くんは聡が自分の推理に一人ニヤニヤしていることなど露知らず、平淡なる口調で司会を始めた。

「えー、今回の競技は早食いです。もう参加者登録は締め切りしました。みなさん、大丈夫ですよ？6時15分から競技はスタートです、それまでは僕の説明聞いてくださいね。では、みなさんお待ちの賞品の説明です。今回の賞品は……」

みなに緊張が走る。

わざとなのだろうか、妙に山路くんは話の「間」の取り方がうまいな、と聡は有識者めいたことを思った。

「五等ブタの貯金箱です……一回お金を入れたら割るまで出てこないんでお金、貯まりますよ。四等地球儀です……結構しっかりしてます。三等DVDプレーヤー、ビデオも見れるタイプということらしいです。二等ラジコン飛行機『銀河』、全長80センチを超えるジャンボサイズ、です」

聡は圭介の肩を叩いた。

「ラジコン飛行機って何でそんなもんが？」

圭介は答える。

「うーん、最近は秋葉原がどーたら流行でそういう賞品増えてるんだって。いや、ウチの町の流行りはホント都会から5年10年遅れって話だけど。まあ、俺らは二等よりかは三等だね」

聡は頷いた。山路くんが目を細める。

「では……一等賞品は……」

隣の奴の心臓の音が聞こえる気がした。

「32インチ3Dテレビ、こないいいものは年に一回出るか出ないかですよ。ね。」

歓声が飛び交う。聡は参加者の熱気に息苦しさや寒々しさを覚え

つつも静かな闘志を燃やした。山路くんは続ける。

「競技は一回、一斉に総勢112人の参加者の皆さんの中から、用意された食べ物を最も早く食べた順の5人の方が賞品を手に入れます。」

しっかし、山路くん、淡々と進めてら。全然緊張してないじゃん。聡は感心した。偉いなあ、マイペースなだけだと思っけど、それはそれなりにスゲーや。

聡高評価の山路くんは突き進む。

「では、ルール説明です。参加者は競技中、早く自分の皿の課題の品を食べればそれ以外の特には規則はありません。ちなみに制限時間は30分です。それ以内に全部食べ終わった人がいない場合は、そこで競技を打ち切り、その時点で最も多く食べていた順から賞品を獲得されます。あと参加者には同時にお水が出されますので、そちらはおかわり自由です。セルフサービスですが。」

「えー、特に質問等ございませんよね？」
特に誰も何も言わなかった。

「では、間もなく15分になります。みなさん、登録時に渡された番号のテーブルにおつきください。」

聡は87番だった。圭介は86番だ。

テーブルに向かいながら、聡はこんなのに参加しているのを学校の女子にでも見られてでもいやしくないか、気が気でなかった。

あゝ、やだやだ。会場のテーブルは全てのテーブルで円を作る形で並べられており、他の参加者の食べる進行度を確認できるようになっていた。

テーブルに用意されたのはホットドッグだった。直径30センチはある皿に20本ずつ置かれている。

「おいしそうだね。」

圭介が囁く。聡は珍しく素直に頷いた。腹が減ってる時は普段の三倍、うまそうに見える。山路くんが時計を見ながら慌てた。

「あ、もう17分ですね。ホットドッグ、20個。最初に完食した人から順に勝者です。始めます、スタート」

不意打ちのような形で競技が始まった。

圭介は戸惑ったままだが、聡は一気に手を伸ばして、ホットドッグに噛み付いた。

む、やはり美味い。味わってるヒマはないけど、美味くて邪魔になることもあるまい。よし、一気に食おう。

隣の圭介を見るとトロトロ片手で食べている、やる気あんのか。

聡の食べるスピードは早い。もう5本食べた。圭介も隣の88番も驚いているようだった。

当たり前だ。俺あ、自分の部屋での自分の時間を大事にしたいから、アホ家族が強いてくる「みんなで一緒にご飯を食べる」のクソルールに対抗するため晩飯を光より早く食う癖がついている。もっともつと短縮できないかって研究してんだ。そんじょそこの奴とは鍛え方が違う。

強いてコツを挙げれば一定のリズムで細かく口に入れていくことと水を飲みすぎないことかな。

回りを見回しても聡ぐらいのスピードの奴はなかない。優勝狙えるんじゃないの？

いや…、一人…、聡から右斜め40度ぐらいに位置する68番が早い…。もう8本食べたか…？

気を取り直して聡はペースアップする。6本目、7本目、8本目、…しかし、そこで何と聡の足を引っ張るのは他ならぬ圭介だった。

6個目に到達して、気が緩んだのか、おかしな呼吸の仕方をした圭介が「うぶっ」と言ったと思ったら、口の中の物を全部ぶちまけた。86のナンバープレートが置かれたテーブルが唾液と噛み砕かれた黄色いものに染められる。圭介本人はのん気にも吐き出した後はスッキリとした顔をしたが、問題は聡だった。

驚いて、大事にしていた食べるリズムを狂わせられ、咽に詰まりかけた。体勢を立て直すのに随分苦勞をした。

圭介が出した「もの」は「イベント」委員がバケツと雑巾を即座に用意し、1分後にはきれいに片付けてくれた。当然、想定された事態だったということだろう。

圭介は聡に散々、謝った後、自分が食べるのもうやめて優勝の可能性のある聡の応援を始めていた。周りの参加者の進行度のチエツク、水のお代わりを代行してくれる。

「やつぱり68番が早いよ、もう11本目食べてる。あと21番島谷のおじさん来てたんだ…、早い、8本目…。32番、あれは…9本目」

聡も9本目だった。

もっと加速するためには、手段を選べない。

聡は開始してから、すぐに思いついた作戦、しかしビジュアルの悪さゆえ、躊躇っていた作戦を決行することにした。

聡はパンを水に漬けた。そしてこの上なく柔らかくなり、食べやすくなったパンを一気にかき込んだ。ソーセージは手で半分がちぎってからまとめて口に放り込む。

頭を使わなきゃ、人間じゃないぜ。でも…、あゝあつ、はっずかし。しかし効果は絶大だった。

他の連中が1本食べる間に聡は2本食べた。聡が13本目を食べた時について何人かの他の参加者が聡の真似をし始めた。

14本、ここに来ると諦める参加者の方が多くなってきた。慌ててトイレに駆け込んで行く者もいる。

聡は16本目に来た。68番は18本目だ。もう無理かも知れない。聡も限界が近かった。体中の穴という穴からパンとソーセージがみ出しそうだった。

苦しい、全て吐き出して楽になりたい！

そう心で叫んだ瞬間、聡の頭にあることがかすめた。

最近、誰かが似たようなこと言ってるの聞いたな…。

ウチのアンポンタン親父だったかな。あいつすぐ弱音吐くからな。いや、違うぞ。誰だっけ。誰でもいいや。そいつ可哀想だな。苦しかったら、やめていいじゃん…そいつも…。俺も…。でも何か言葉の続きなかったっけ…。何だっけな…。ああ、「苦しかった、楽になりたかった、でも頑張った」って言ってた気がするぞ。

ドククショウ！そんな下らねえこと抜かすのはどっかの成功者だな。そーいや、オリンピックが終わりかけてる頃じゃなかったか？こりゃ、間違いねーな！スポーツなんざ全く興味ねーのに夕飯ん時テレビでガンガンやってやがるから、チラツと耳に入っちまったんだろ。メダル何色だ、この野郎…。

突然、靄からホットドッグが飛び出てきた。

聡自身が口に運んで来たのだ。意識は別のところにあっても体は早食いを続けていた。

あ、危ねえ。聡は我に返った。俺は何でこの肝心な時に、そんなふうでもないこと考えてんだ。

食べるんだ食べるんだ食べるんだ…。

顔を真っ赤にして破竹の勢いで追走する聡の肩を不意に圭介が叩き、言い聞かせた。

「ダメだ、聡、68番が完食した！ペース抑えて三位を狙おう！」

勿論、聞こえていた。

しかし、聡はそれと同時にさっきの言葉を誰が言っていたのか思い出していた。

彼はオリンピック選手でもなければ、きっと成功者でもなかった。そして聡は食べるのをやめなかった。聡だってそれが誰なのか思い出したからと言って、同じ言葉を叫んだ者として本人の気持ちを理解できたような気がしたからと言って、何故食べ続けるのか、理由が釈然としなかった。

それは彼に対する同情のようで敬意のようで…。

何故この天才西田聡様があんな小者にそんなものを感じてしまうの

か…。
北野ファンクラブよ、ビートたけしよ、高田ギョロメ文夫よ、…俺を許せ…。聡は二位になった…。

く下)

がらフェス終了後、道端でしこたまゲロった後に聡が向かったのは、あの公園だった。

オリンピック選手でもなかるう、悲しいかな成功者でもなかるうスーツのおじさんはあのブランコにまだ、いた。

おじさんは聡と圭介を見上げると寝ぼけたような声を出した。

「君達…、また来たのか」

聡はおじさんに二等賞品、ラジコン飛行機を差し出した。

「これ、買ってくれよ。4000円でいいからさ」

おじさんは、数秒の当惑の後、口を開いた。

「これ、新品だろ？高い物なんじゃな…」

聡は遮った。

「オッサン、確かに昔には戻れないし、オッサンは明日からまた仕事があるけどさ…、大人だって遊んでいいと思っぜ」

おじさん特注のドロッドロガソリンまなこが、一瞬、…本当に一瞬だけど輝いた気がした。

おじさんは、きつと最初は黒々してたはずが、いつしか色褪せてグレーになったのだろう財布から100円硬貨を4枚取り出して、聡に握らせた。

「家建てた時、4000万もしたんだぞ。ローンだけどな！何倍か、暗算できるか？」

聡はすかさず言った。

「分かん、俺は数学は苦手だ」

聡と圭介はコンビニに寄ってから海に来た。

コンビ二に寄ったのはもちろんMr・Elephant 9月号を買ったためだ。

聡が小石を投げると一度も水面を弾かずそのまま潜った。

…俺は本当に運動音痴だな。全然青くないし、ゴミも多いけど…、このノンキな我楽多町には駅からチャリンコで6分の海があるんだ。まるで安くて早くて手軽なインスタントsea、でもいいにおいだ。圭介がふと呟いた。

「何だかんだ言っただ聡はさ…、人がいいよ…」

大きめの波が、誰かの作った砂の城を呑み込む。

「うるせえ」

聡は言い切った。

「俺は自分のやること全部、分かってる、理解してる。俺を、しょぼい型にはめないでくれ。そういう、意地っ張りな正義の味方、みたいなのが嫌いだ。幼稚だよ」

もう圭介は話を聞いていない。足元に小枝で何やら文字を書いている。

「お前、この野郎…」

その時、東の空から銀色の光が聡の瞳を貫いた。

そこは薬局のすぐそばの空、ラジコン飛行機は悠々と駆け回る。

さすが二等商品。迫力あるぜ。

「あーあ」

聡はうめく。よく分からない爽快感で少し上がり気味の口の端を無理矢理下げて…。

俺あな、こんなもんじゃないぜ。

黄金センスの大砲掲げて、このバカでかい空と海を引っくり返すくらい人間になってやるんだ。

納得するまで納得しねえ。どうだ、チクショー！コノヤロー！

「くっただらねえ！」

聡は期待したが、咆哮は静かな海面に少しの揺らぎも与えず…消えた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2571q/>

我楽多町の海辺で

2011年1月25日22時28分発行